

光
る

小
櫓
山
博

集 英 社

光る女

昭和五十八年 七月一〇日 第一刷発行

定 価 九八〇円

著 者 小檜山 博

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部〇三〇二三八二八四二
販売部〇三〇二三〇一六一七一

印刷所 共同印刷株式会社

検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えます。

© 1983 H. KOHIYAMA

Printed in Japan

ISBN4-08-77242-5 C0093

目次

第一章	墓標	5
第二章	けもの雪	53
第三章	骨の音	105
第四章	光る女	157

装
幀

司

修

光
る
女

第一章 墓 標

晴れているのに、濁った空だった。空気が黄土色にけぶっている。暑かった。重なり合った建物、ぐにやぐにや歪んで見えた。地面を這いまわる車が昆虫の群れみたいだった。仙作は顔を横向けると高い音をたてて唾を吐き、上野駅の中央口を出た。裸足だった。アスファルトは焼けていたが、熱くなかった。足の裏がペタペタ鳴った。背中の、南京袋で作ったリュックサックが当たっている部分を熱い汗が流れる。

幅の広い道路を横切り、向かい側にある交番へ向かう。自動車がとまって警笛を鳴らした。蒸れた空気が震えた。仙作は車の列の中をまっすぐ歩いた。リュックサックの中に入っているナタが、木の鞘の中でカタカタ鳴る。乾いた、いい音だった。タクシイの運転手が扉の窓から頭を出して怒鳴った。茹玉子みたいな顔をしている。仙作はそのほうを振り向くと、ちよっと首をかしげて近寄っていった。縦横に伸び縮みする運転手の口の中で、赤い舌が舞っていた。ひたいに浮いている青筋が蜘蛛の足みたいだった。仙作はその男の鼻を右手の拳で叩いた。グサ、と音がし、頭が車の中へのけぞった。後ろで警笛が鳴りつづけた。

警官が走ってきて仙作の腕をつかみ、とまっていた車に動き出すよう合図をした。警官の背丈は仙作の肩までしかなかった。鼻血を出した運転手が扉を開けようとしていた。警官が、ここで降りちやいかん、と怒鳴った。車に囲まれて扉は開けられなかった。鼻血の男は後ろの車にせかされ、仙作に向かってわめき散らしながら走っていった。音が増え、暑かった。

——ちゃんと横断歩道を歩けよ。と警官が言った。仙作は舌打ちして空を見回した。光がはぜていた。

鴨居へ頭をぶつけないように腰を屈めて交番へ入る。中にいた五、六人の警官が振り返った。眠そうな眼だった。みんなの口がのろろ開いた。暑さにやられている眼をしている。仙作はリュックサックをおろすと、中から葉書を一枚出して椅子にかけた。首や腕を黒い汗が流れた。ぬぐうと手のひらに泥水がついた。

——靴はどうしたの。と向かい合って坐った警官が聞いた。くわえている煙草の紙が汗で濡れていた。

——靴？ 東京は裸足じゃ駄目かや。と仙作は折れ曲がった葉書の皺を伸ばしながら言った。警官が摩るマツチの音も湿っていた。

——熱いだろ、足の裏。

壁の扇風機に向かって制服の胸を開いている警官が言った。口尻に薄笑いがにじんでいた。

——なんもよ。あんたらとは違うっちゃ。二十年以上もおまえ、山ン中、走りまわってきたんだぞ。

仙作は齒を剥いて笑った。喉仏が弾んだ。

——どこからきたの、いったい。と前にいる警官が煙を吹き出して聞いた。胸のポケットから手帳を出し、ポオルペンを抜いた。

——北海道よ。オホオツク海沿いのよ、海から十里も山奥さ入った滝ノ上ちゅとこだ、知ってつか？

警官が、仙作の差し出した葉書を手に取って眺めた。読みにくいな、と言った。扇風機が首を振るたびに、金属がこすれ合う音をたてた。仙作は口をチャツと鳴らして扇風機を睨んだ。鼻の先から汗が垂れた。ガラス戸が車の音で壊れそうにがたつく。仙作は熊の皮で作った袖なしのチヨッキを脱いだ。下は素裸だった。胴を伸ばすと、腰のたるみにたまっていた汗がはじけ散った。

——こんな焼きガマン中でよく生きてるもんだでや。と呻いた。

麦茶を出してくれた。茶碗を持ってきた警官が、齢とくはなんぼよ、と聞いた。ニンニクの臭いがした。仙作は足もとのリュックサックから出したタオルで胸や脇の下の汗を拭きながら、二十一日、と言った。黒のコオル天で作った乗馬ズボンも皮膚に貼りついて、きもち悪かった。

——ズボンも脱いでいいぞ。と麦茶をくれた警官が笑った。

——ほんとかや、なかに何もはいてないんだけんど。と仙作は言った。

笑い声が起こった。顔を上向け、喉の皮を波立たせて笑っている者もいた。それには参るわ、という声が聞こえた。車の急ブレーキの音やエンジンの破裂音がつづく。鼓膜が指で押されるように痛んだ。空気が粉っぽく、口の中がざらついた。

仙作は葉書を持っている男に、その差し出し人のとこさ行くんだけんどもよ、おせえてくれや、と言った。乗馬ズボンのベルトをゆるめ、タオルを中へ入れて尻や股を拭いた。警官が低い声で葉書の文面を読みはじめた。『仙ちゃん、お元氣ですか。送別会ありがとう、あの日のこと一生忘れません。わたしもやっとレジスタアの仕事に慣れました。夜の学校はつらいけど、がんばります。わたしがこつちにいるあいだ、一度、遊びにきてください』。仙作は肩まで垂れている髪を掻き上げ、ズボンの中から引っぱり出したタオルで首筋を拭いた。みぞおちまである顎鬚の先でも汗が光った。

——村の人か。と警官が上目づかいに見てきた。白眼が鉛色だった。

——そうよ、二年前から東京さきて働いてんだけんどもよ、俺の嫁さんになる女よ。

扇風機の前にいる男が頭をかしげた。前にいる警官がまた葉書をひっくり返し、去年のでないか、と言った。おかしいか、と仙作は言った。リュックサックの小物入れから栗子くりこの写真を出して見せる。東京へ出て一カ月ほどして送ってきたもので、十七歳だった。まだオカッパ頭だった。両足をそろえて立ち、下げた手は指先を伸ばして軀へくっつけていた。後方に、働いているスウパアマケットが写っていた。警官が下唇を突き出し、顎を小刻みに揺すった。

——えらい美人でないかあ。

覗き込んできた二人の警官が、びっくりしたという声を出した。

——そうよ、おまえ。東京にだってこんなべっぴんはちよつといないべ。村じゃおまえ、十年前から誰が嫁にするかって大騒ぎしてんだからな。

写真を取り戻しながら、仙作は裸の胸を突き出して警官たちを見まわした。

外へ出ると露みたいな光が降っていた。建物も地面も黄色だった。裸足の裏に触れる舗装が熱かった。しかしきもちよかった。足を踏み出して踵がつき、次いで土踏まずから指がつくとき、いい音がした。仙作はその音をひろいながら歩いた。口笛が出た。

歩いてくる人の群れが二、三步前で両わきへ分かれた。仙作の胸から上が人の頭の上へ突き出た。人々の視線は初め裸足へきた。それから乗馬ズボンと熊皮のチョッキを通して、顔へきた。眼は合わせなかった。仙作は時おり後ろを向いた。通り過ぎた人たちが振り返ってリュックサックを見ていた。立ちどまっている者もいた。仙作はその人たちに軽く手を振った。

ズボンのポケットで、交番で貰った交通地図がごそごそ鳴った。喉がいがらっぽく、咳をして唾を吐いた。黒い塊が飛び、足もとを這う自分の影の中へ落ちた。足の裏で踏みじると、ゴムみたいに硬かった。

通りにあつた銀行へ入り、一万円札を一枚、全部、十円硬貨にした。警官が、なんでも自動販売機だから、と注意してくれたのだった。二つに分けて、乗馬ズボンのポケットへ入れた。

それから地下鉄に乗る穴へもぐった。埃でむせた。歩くたびに硬貨のふくらみが前後へ揺れ動いた。地下鉄は混んでいたが、仙作のまわりにだけ空白ができた。乗客の頭が、仙作の首の下で雲みたいに動いた。乗客は顔をそむけ合つて眼を閉じたり、吊り下がっている広告を見上げていた。皮膚が青黒かった。どの顔もミイラみたいに脂気がなかった。眼だけはイタチのように動い

た。

仙作は地図を開いて降りるところを探した。天井から吹きおりの冷房の風は湿って生ぬるく、
饅⁺えた臭いがした。足の裏に、噛み捨ててあつたガムが粘つく。足を床へこすりつけ、長いこと
かかつてガムをとった。舌打ちがはじけた。横を向くと漫画の本から顔を上げた青年と眼があつ
た。仙作が笑うと、青年は怯えたように顔を引きつらせて下を向いた。

渋谷で降りた。地上へ出ると、頭へ熱く蒸れた光がかぶさってきた。腰のまわりや内股を、コ
オルタルみたいな汗が流れた。舌が土ぼこりでざらついた。吐いた唾が鼠色だった。

一度、井の頭線の降り口へ行き、そこから競馬の場外馬券売り場があるというほうへ向かった。
行き交う人の眼が裸足にきた。仙作は途中、石油スタンドの角にある水道の蛇口で足を洗った。
コンクリイトの上を黒い汁が流れた。ついでに口をすすぎ、頭を蛇口の下へ突っ込んだ。チヨッ
キを着たまま上半身に水をかぶった。

葉書に書いてある番地に着き、床屋へ入ってアパートの場所を聞く。眼のまわりを黒く塗った
女が忙しいんだというように眉を寄せ、わかんない、と言った。隣の薬局の中年女も知らなかつ
た。そこから二軒おいた家で聞くと、すぐ隣だと言った。薬局から五十メートルも離れてなかつ
た。

木造で二階建ての、ぼろなアパートだった。玄關の戸を開け大声で、こんにちは、と叫ぶ。老婆
がたたきへしゃがんで犬に小便をさせていた。仙作を見てあわてて犬を抱え、廊下の奥へ歩いて
いった。コンクリイトが黒く濡れていて、足の裏がぬめった。生ぬるかった。右手にある板戸が

開き、ヒマワリの模様のついた前掛けをした女が出てきた。髪の生えぎわが赤かった。

——怒鳴らなくても聞こえます。と女は睨んだ。細い首に浮いている血管がミミズみたいに動く。視線が忙しく仙作の顔から腰を伝って足もとへおりた。睫が震えた。一度、廊下へ出た女がそろそろと後ずさり、軀を半分ほど板戸の中へ入れる。

栗子の名前を言って、何時ごろ帰ってくるべ、と聞いた。女が部屋から頭だけ出し、引越してつたよ一年前に、と言った。声がうわずった。

——働いてるマアケツト、どこにあつか知らんべか。

女がうるさそうな顔つきをした。早口で、新大久保駅の裏だつて言つてたけど、と言った。板戸が高い音をたてて閉まった。仙作はリュックサックを揺すり上げ、なんちゆう店さ、とわめいた。戸の中から返事はなかった。

外へ出ると、きた道を戻った。湿つていた足の裏が乾き、また背筋へ濃い痺れがのぼった。薬局の前で立ちどまり、入り口へ近づく。戸の間へ頭だけ突っ込み、白衣を着た女に、すぐそこだったでないか、わからんちゆうことないべや、と言った。女の眼玉が剥き出た。口を半開きにし、背中を向けて奥へ走つて行つた。

渋谷から山手線に乗った。乗客の顔が剝製みたいだった。空いていた席に坐ると、隣にいた若い女が立つて行き、斜め向かいの空席へ坐った。

——そんないやみなまねせんでもいいべさ。と仙作は大声で女に言つた。顔を横向けている乗客が眼だけを動かし、仙作と女を交互に見た。天井の扇風機が、ゼンマイ仕掛けの玩具の恐竜み

たいに首を振っていた。蝶番ちようがひがキィツキィツと鳴った。仙作はうつむくと、口を小さく鳴らした。女が下を向いたまま立ち上がり、足早に隣の車輛へ移って行った。靴の裏が床を叩いた。

新大久保駅で降りた。駅前にある果物屋へ行く。店先で十個ほどの小ザルへリングを盛っている中年女に、近くにあるマアケットを聞く。女は顔も上げず、知らんね、と言った。傷のあるや腐りかけているリングを、ザルの底のほうへ傷を下に入れて入れている。その上へ傷のないリングを盛って隠した。

—— あんた何年ここに住んでるのよ。と仙作はまわりの建物を見回しながら聞いた。息を吸うたびに鼻の穴の壁へ埃が貼りついた。眼がちかちかした。女がリングを一個持ったまま腰を伸ばし、仙作を振り返った。

—— なんであんたにそんなことこたえる必要があるのよ。と口を尖らせた。唇が土色だった。道路の反対側に交番が見えた。仙作は腕のほうへずり落ちているリュックの背負い紐を肩に掛けなおすと、リング、そんなことしてもバレちゃうさ、と言って歩き出した。アスファルトが溶けていて、足が沈んだ。女が首を突き出し、よけいなお世話だよ、田舎もんが、とわめいた。仙作は鼻の奥で笑った。

交番で聞くと、駅周辺にはマアケットが六軒あると言った。年老いた警官は、めんどろくさそうな手つきで場所と名前を書いた。時おりカアツと痰を剣がし、それを喉を鳴らして飲みこんだ。書いている途中で一度、仙作の裸足へ視線をよこし、あんたの名前と住所は、と聞いた。ポオルペンのインクが薄くなり、紙片の隅へ強く押しつけてぎざぎざの線を書いている。